



## ロシアのウクライナ侵攻とドイツのエネルギー事情

ドイツではロシアによるウクライナ侵攻により、ロシアから天然ガスの輸入が制限されるなどエネルギー問題が深刻となり、物価高も止まらない。ドイツのエネルギー事情について、ミュンヘン工科大学のミランダ・シュラーズ教授(写真)に話を聞いた。2022年6月、テレビ朝日の山口豊アナウンサーが再生可能エネルギーの取材のためドイツを訪れた際のもので、私がコーディネーターと通訳をした。

シュラーズ教授はアメリカ出身でドイツ在住の政治学者である。2011年の福島第一原発事故の際に、ドイツで脱原発について議論する国の倫理委員会のメンバーに選ばれ、現在も核廃棄物最終処分場についての市民参加による選定プロセスに関わっている。10代のころから日本語を学び、日本の大学で教鞭を取るなど日本語が堪能である。日本、ドイツ、アメリカの視点を持ち、広い視野で持論を展開する。

シュラーズ教授はロシアによる戦争によってドイツがどう変わったかについて「化石燃料に頼りすぎている現実が露わになった。いつそう再生可能エネルギーを増やすことを決め、化石燃料への依存を減らし、エネルギーの効率化を推進する。

セクターカップリングを進めて新しいエネルギーを作り出し、新しいセクターに生かし、新技術を活用。軍事分野の危機とともに気候保護分野の危機を解決しようという試みだ」と話す。

また「ロシアの天然ガスを使うのは、戦争にお金を出しているのと同じ」と話し、ドイツはガスの需要を減らすとともに、貯蔵を計画している。「欧州内で互いにガスを融通していて、欧州各国が団結するきっかけになっている。最近ノルウェーやオランダからガスを輸入していて、2023年春または2022年末、初めてのLNEターミナルができるかもしれない。そうするとアメリカからガスが輸入が可能となる」という。

ドイツでは現在3基の原発が稼働しているが、2022年12月末にすべて停止することになっている。私は6月にハーベック経済・気候保護大臣に話を聞く機会を得たが、大臣は「脱原発の変更はありえない」と断言していた。シュラーズ教授も「原発がウクライナ戦争の一部になってしまっている。チェルノブイリ原発が占領され、ウクライナの原発が攻撃を受けている。飛行機が原発そばを低空飛行しており危険だ。原発は安全な技術ではないから、政治的安定性が必要。しかし戦争時に政治的安定性はない」と話した。

また、天然ガスの代替として、一時的に石炭や褐炭の利用が増えることはありそうだが「2030年に石炭から脱却するという決定は変更しない。この目標はとても重要で、気候危機はとても深刻な問題だ。戦争だから石炭に戻るというのは無責任であり、決して許されない。エネルギーの効率化、再エネ利用のため、送電線の整備、グリーンエネルギーの技術飛躍は押し進める」と言い、ドイツの気候保護政策はぶれない。

ドイツでは2045年に気候中立を目指しており、シュラーズ教授は「この戦争を大きな飛躍の機会とすべき。戦争の副産物として、これまでにない速度で政策変更が起きており、産業界がガスの消費を減らし、効率化が驚くべき早さで進んでいる。気候保護対策だけでなく、農業改革や、欧州全体で木を植えるキャンペーンをすとか、消費などライフスタイルについて考え方を改めるなど循環経済が必要」と言う。

戦争は泥沼化しており、終わりが見えない。最後に「ウクライナとともに私たちも戦っている。ウクライナは欧州の民主主義のため戦っているのだから、私たち欧州はウクライナをできる限り支援していく」という言葉が印象に残った。

ごみかんドイツ特派員 田口理穂

### AKIRA の 成長記録

3年ぶりに里帰りしてから早1月半。明は今回も実家のある長野県の中学校に通っています。クラスは和気あいあい、先生の雑談は面白く、授業中は先生がほとんど一人でしゃべっているの生徒はあまり発言することなく「楽チンだ」とか。何より一体感があるのがいいそう。体育祭と文化祭のためにみんな真剣に取り組んでいて、達成感があるといいます。

ドイツには朝の会も終わりの会もありません。クラス全員での「起立、礼」や、授業の最初に生徒が「平常28人、今日は1人欠席、出席27人」と発表するのが、とてもユニ



クに聞こえるらしい。給食も掃除もドイツではありません。日本でみんなエプロンをして給食を配り、食べ終わったら床を雑巾がけというのも一体感を高めます。「制服があるのもみんな一緒という感じ」といいます。

明は都会や高層ビルが大好き。連休に大阪に行ったところ、食べ物が所狭しと並ぶデパートに感激し、「デパートは日本の文化だ。商品がすごくきれいで店員はとても丁寧」と言い、建物や街並み、デパートについても「ドイツはダサいし、全然だめ。日本がいい!」とべた褒めです。前回の帰省は小6でしたが、今回は中。少し成長してこれまでとは違った目で日本を見ている。新しい視点に、私も日本のよいところを再発見しています。